# 哈爾濱市（ハルピン） その1　高速鉄道に乗って

寺西 俊英

今年も7月17日から24日にかけて大連に行き友人たち（殆ど中国人）と旧交を温めた。

本来は5月に行く予定にしていた。というのは、大連の5月は美しく輝く時だからである。色とりどりの花が咲く中で5月初めには柳絮（りゅうじょ）が人々に絡み合うように飛び交う。吹き溜まりに綿菓子のように丸まった柳絮にライターで火を付けている人もいる。よく燃えるのだ。こうした光景を見飽きている中国人には目や口に入るので鬱陶しいらしいが、漢詩にも多く詠われたこの光景が私は好きなのである。下旬には大連名物のアカシアの花が咲き乱れ、街をほのかな甘い匂いに包み込む。すこし郊外に車を走らせると、白とピンクの百日紅の並木道が美しい。路上には籠に山盛りに積んだサクランボを売る人がそこここに見られる。日本では高価なサクランボが大連ではたらふく食べられるのだ。

この大好きな5月に訪問しようと計画を練っていたのだが、4月に入るころ上海周辺で鳥インフルエンザが発生し、日を追うごとに感染地域が広がり、この時期に中国に旅行したいと言える雰囲気ではなくなっていった。大連は上海から遠く離れているから問題ないと言っても、「感染した人が大連に遊びに来ることだってあるでしょう」と言う言葉に押し切られ、旅行を延期せざるを得なくなった。あれやこれやで結局7月下旬に行くことになったのである。そのころ日本は猛暑に襲われていた時期なので大連で避暑も悪くはないな、と思うことにした。昨年は8月中旬に行ったので1年ぶりの訪問である。NH903便（ANA）はほぼ予定時刻通り現地時間の12時15分ころ無事着陸した。いつもは霧がかかったような天候なのにこの日は珍しく下界がはっきりと見え、私を歓迎してくれているように思った。

さて前置きが長くなったが今号は哈爾濱市の訪問記である。8日間の中で2泊3日の小旅行をしたのである。ハルピンに行くのは今回が3回目である。初めて行ったのは2005年である。この年は新潟支店に勤務していた時で、同じ経済グループの会社の人達と10人のツアーを組み大連にある子会社見学を大義名分として、新潟空港からハルピンに行きそこで乗り換えて大連に向かった。新潟空港から大連への直行便がないためである。大連に行ったのもこの時が初めてであった。余談になるが2年後の2007年に大連に赴任することになるとは夢にも思わなかった。これも何かの縁であるのだろう。ハルピンは中継地なので後述する「中央大街」だけの観光に終わったが、このロシアの色彩を帯びた都市を少しでも見られたのはうれしかった。2度目は2009年で大連勤務中に友人が訪問してくれ、4～5人で東北の各都市をまわった。しかしハルピンは1日だけの滞在のため思うように行動できなかった。したがって今回は友人が案内してくれたのであるが、気ままにゆっくりと見られたのは初めてであった。

ハルピンに行こうと思ったのは、昨年の12月に開通した高速鉄道（中国では“高鉄”［ガオティエ］と呼んでいるので、以下“高鉄”と書く）に乗りたいし、のんびりと市内を散策したいと思ったからである。さらに言えばこの猛暑の中、北緯45度45分（日本では北海道の稚内の北の宗谷海峡と同緯度）にあるハルピンはどれだけ凌ぎやすい気候かも実感してみたかったこともある。

高鉄の大連における駅名は、「大連北站」（「站」は駅のこと）である。高鉄は在来線の西側に並行して高架で新たに造られた。したがって駅も線路も電車もすべて新しくて気持ちがいい。大連北站は現在の大連駅より20キロくらい北に造られている。昨年8月に行ったときは、まだ工事中でとても12月1日に開通するとは思えなかったが、その時から3か月余りで高鉄が走り出しているのだから中国の工事は速い。しかし日本で言えば、完成しても種々の完成検査や車両を何度も走らせて不具合がないかチェックするだろうが、これらは果たして実施されたのであろうか。2011年7月に浙江省で高速鉄道の大事故が起きたが原因は何か未だに公表されていないと思われる。急いで走らせることによる無理があったのであろう。家内はしきりに「乗っても大丈夫なの」

と心配していたが、「走り始めて8か月経っているから大丈夫だよ」と答えるしかなかった。

ここで高鉄の運行の全般について紹介したい。大連からハルピンの距離は約920キロである。東海道・山陽新幹線では東京駅からスタートして広島駅を過ぎて新岩国駅の手前までの距離である。この区間を平均時速300kmで走るのである。新幹線と同様にドアの上にある電光掲示版に速度が表示されるが、最高時速は308kmであった。一番速い電車は大連北站と哈爾濱西站の両駅を3時間30分で結ぶ。途中の停車駅は、瀋陽北站と長春西站の二つだけだ。大部分の電車は4時間余りかかる。それでも以前は在来線の特急でも9時間以上はかかったことを思えば随分近くなり、日帰り出張も可能になったということである。

高速「和諧号」が発着する‘大連北站’構内　写真下方が待合室、その２階には多くの店がずらりと並んでいる。

駅は結構たくさんあって聞いたこともないような駅もいくつかあった。大連北站に表示してある時刻表を見ると、始発は6時25分、その後1時間に1本か2本しか発車しない。従って東海道新幹線のように5分おきに発車し、しかも途中駅で待機している電車を追い越していくようなダイヤではないので運行に要する技術ソフトは簡単であろうと思った。日本の新幹線は、走り始めて約半世紀が経つがよく事故が起きなかったものだと感心する。地震があれば減速したり、自動停車したりする技術は素晴らしく、これほど安心感のある乗り物は他にはないのではなかろうか。これだけの高速鉄道がありながら、この狭い日本に、そして人口は減少していく日本に、そして福島であれだけの事故を起こした日本に、電気も資金も莫大に食う「リニア」がなぜ必要なのであろうか。

7月20日8時半ころ大連北站に着いて切符売り場に向かった。時刻表を見ると9時18分発の電車があるのでそれを求めると1等車ならあるという。旅行社は当日行けば十分買えると言ったので安心していたが、予約がかなりあったということであろう。2等車は11時2分までないというので仕方なく11時2分発G311電車の切符を購入した。新幹線と異なり切符を購入するときは、中国人は身分証、外国人はパスポートを見せなければならない。そして切符には中国人は名前が印字され、外国人はパスポート番号が印字されるのだ。従って万が一事故が発生しても日本とは異なり氏名はすぐわかるのだ。浙江省の大事故も生存者と死亡者の氏名と人数はすぐ把握できたはずと思う。

切符は到着駅で回収されないので記念に持ち帰った。各車両は、全車指定席で一等車と二等車があるのだが、安い2等車から売れていくようだ。というのも大連←→ハルピン間は2等車が403.5元に対し、1等車は708元と飛行機並みの料金なのである。それにしても403.5元という端数のある料金は不思議な数字である。中国人の友人にこの話をすると、彼は「3.5元はおそらく保険料ではないか」と言っていた。キリよく400元と700元にすればいいものを。発車時刻まで2時間余りあるのでゆっくりとこの素晴らしい駅を見て回った。

「等候室」と書かれた待合室はかなり広々として、全体が白と薄いグレーの色調でまとめられている。トイレにも行って見たが、在来線の駅のトイレはもとより空港のそれより清潔そうである。いろいろなお店がある2階にエスカレーターで行って見たが、レストラン、各種土産物店、薬屋、などがあった。その中の“必勝客（ピザハットの中国名）”というレストランに入って朝食代わりに珈琲とピザを注文した

が、味はよく従業員の応対もよかった。10時半になったので発車番線の近くの椅子に移動した。するとまもなく乗客たちが立ち上がって列を作り始めたので私もそれに並んだ。待合室に入るときに切符と荷物のチェックがあったが、出発の番線に下りるときにまた切符を機械に通した。11時2分の電車に乗る乗客が全員通過したかのチェックであろう。

ホームに降りて私は、「和諧号」の7号車16－Bの座席に腰を下ろした。外側はすこし薄汚れていたが白い車体であった。中国の別の高鉄路線の車両と同じである。16番の席はすぐ脇がドアである。つまり横に通路を挟んで5席あり、16列であるから1車両の定員は80人ということだ。G311の電車は8両編成なので定員640人を乗せて走っていることになる。中国を旅するといたるところでタバコの煙に閉口するが、高鉄は全車禁煙なのもよい。ほぼ満席となり、あちこちでトランプが始まる。例のひまわりの種をおしゃべりしながら口に入れたりする人たちもいる。とにかくにぎやかで静かに本をよむ雰囲気ではない。

すると何のアナウンスもない内に静かに電車が動き始めた。「あれっ」と思って時計を見ると、針は10時57分を指していた。私の時計が遅れているのかと思い駅の大きな時計を見ると、やはり10時57分である。定刻5分前である。中国では「定刻」という言葉は馴染まないのかもしれない。以前2～3度このような経験をしたことがあるので驚かなかったが、初めての人は驚くであろう。おそらく切符を機械で通して全員通過したことが分かるので発車したのであろう。善意に解釈すれば“自己責任で行動しなさい”ということかもしれない。日本のように四六時中アナウンスする国は逆に少ないのではと思う。10数年前にパリからユーロスターに乗った時も出発のアナウンスはなく静かに発車したと記憶する。日本人は常にあれこれ注意されないと行動できない民族かもしれない。

女性の乗務員が時折通るが、スチュワーデスのような服装をしてスタイルもいい。新幹線のように検札はないので何の仕事があるのだろうと思ったりした。車内のアナウンスは駅に到着する5分前くらいに、「(次の駅で降りる人は) 予め準備してください。」という言葉を中国語と英語で伝えるだけである。車内販売は、手押し車で通る売り子とアイスクリームだけを売る人がたまに通るだけである。

高速「和諧号」　真っ白い車体だが、少々汚れていた。

電車が動き出して市街地を抜けるとすぐ外は緑一色になる。見渡す限りのトウモロコシ畑が延々と続く。時折ポプラの防風林が直線的な美しさで目を楽しませてくれる。地図を見ていただくと分かるように、大連からハルピンまで一部を除きほぼ直線と言っても過言ではない。その間景色は殆ど変化がない。ひたすら北へ北へと走るのである。窓の外をずっと見ていたがトンネルや橋梁は見た記憶がない。後から来る速い電車に追い越されることはない。運転時は駅に近づく時以外は減速したりすることも殆どない。時速300キロ平均で走っているがさほど速さは感じない。とにかく外を見ていると国土の広さに圧倒される。北海道と言えどもこれほど広くはない。このようであるから乗客は乗るとすぐトランプを始めたりするのであろう。

4時間が過ぎる頃、“降りる準備を”という車内放送があった。11時2分発の高鉄（本当は10時57分であったが）は大連北站を出て途中6つの駅に停車し、15時9分到着予定である。いよいよ哈爾濱西站だ。駅に近づくと流石に建物が増えてきた。4年ぶりのハルピンはどのように変わっているのであろうか。ところでハルピンの市名の由来を調べてみた。すると諸説あって定説はないとあった。そのなか「白鳥」を意味する満州語という説が紹介されていた。私は新潟にいた時、冬に白鳥が羽を広げ飛ぶ雄姿を何度も見たからか、北の街「ハルピン」の市名の由来はこの説がふさわしいと感じた。　（続く）